

地域の底力

熊本県阿蘇郡南小国町

美しい里山を舞台に
あらたな挑戦が広がる
熊本県南小国町

かつて黒川温泉の改革が注目され、
観光客を集めた熊本県南小国町では、
今、さらなる挑戦への熱が伝播している。
人々の自主性を培う取り組みとともに、
里山で暮らす昔ながらの人の絆が、
その流れを力強く支えている。

縁結びの滝として知られる南小国町の「夫婦滝」は、熊本県平成の名水百選の一つ。滝が流れ落ちる田の原川は筑後川の源流であり果ては有明海へと至るため、この清流を守ることは下流の環境保全にもつながるという意識が地元根付いている。



住む人と役場の 自主性を育むために

大分県に隣接する熊本県東北部の阿蘇郡南小国町は、人口約三九〇〇人の自治体だ。阿蘇外輪山の北に位置する町の主要産業は、温泉が要となる観光業のほか、農業や林業。町域の八割を森林が占めるのどかな景観ゆえ、NPO法人「日本で最も美しい村」連合の加盟地域の一つになっている。

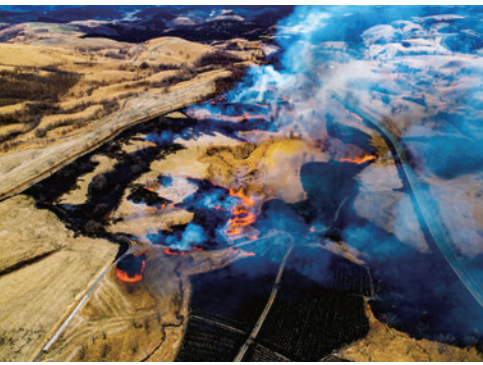
その豊かな自然を守り未来へとつなぐため、二〇一五年から現職を務める高橋周二町長が指針として掲げたのは「上質な里山」だ。

「住民にとってごく当たり前だった町の美しい里山の景色を改めて意識し、受け継いでいこうという思いです。それをかなえるためには、住む人が元気でなければいけません。そこで私が大切だと考えたのは、町の人々が自発的に考え、挑戦するような方向に踏み出してもらおうことでした」

住民の背中を押したのは、二〇一八年から始まった起業や事業承継などを支援する「夢チャレンジ推進事業補助金」。

「情熱はあっても何から手をつければいいのか分からない、という方々をバックアップする仕組み

下／日本の広さを誇る阿蘇の草原は、冬枯れの状態に火を放つ野焼きにより健やかな環境が維持されてきた。一説によれば、受け継がれた歴史は一〇〇〇年以上とも伝えられている。
（写真提供：南小国町）
左／町の東端に位置する「松にきく虹の道」は、かつて参勤交代の道であり、多くの人々が行き交った。



「自分自身が楽しまなければ、役場の職員にも住民にも言葉は響かない。号令をかけるだけではなく、さまざまなチャレンジと一緒に汗をかきながら関わっています」と話す町長の高橋周二氏。

です。ジャンプする前のホップ・ステップを、町が後押しします。その結果、資格を生かして美容院を開きたいなど、小さいながらも数々の挑戦が生まれています」

役場内でも、道は切り拓かれた。「小さい自治体は、将来の方向性が役場の動きにより大きく変わっ

てきます。首長は任期をもって交代しますが、職員はここで長ければ四〇年ほど働く。首長の指示を待つだけではなく、自主的に考えて動くことが大切だと職員に伝えていきます」

コミュニケーションの充実を図るためにまずは朝礼が設けられ、あらたなプロジェクトを立ち上げる際には、課を横断するチームをつくり、議論。先進的な他の自治体への視察も重ねられてきた。

「役場内での横の連携は現在も積極的に進められ、若手職員が役割を担う機会が増えました。職員からの提案も増えつつあり、やりがいがあるという声が聞かれるよ



南小国町役場は窓口から議会が行われる大会議室棟まで、町が誇る小国杉をふんだんに使用。2019年には、NPO木の建築フォーラム主催「第14回木の建築賞」で、「木の建築大賞」を受賞した。大会議室棟は「きよらホール」と名付けられ、イベントにも活用されている。

うになったのがうれしいですね。私は『挑戦の種火』と言っているのですが、役場にしても住民にしろでもその種火の熱が少しづつ伝播でんぱし、挑戦の輪が広がる環境が生まれてきていると思います」

民間の視点で 地域づくりを支える SMO南小国の存在

その「挑戦の種火」の熱が広がっていくのを後押ししているのは、二〇一八年設立の「SMO (Satoyama Management (Marketing))



SMO 南小国が運営する南小国町総合物産館「きよらカアサ」では、ジャージー牛の牛乳を原料としたかりんとう他、地元の特産品が並び、土産物を求める観光客が立ち寄る。館内では日替わり弁当の販売もあり、地域の人にとっても頼りになる場所だ。

Organization) 南小国」。町が出資した株式会社で、町長の高橋氏が代表取締役を務める。また、商工会、JA、観光協会、森林組合といった地域の団体も広く関わっている。

そのCOO (最高執行責任者)として実務を進める安部浩二氏は、携わってきたローカルベンチャー事業などを介して南小国町と縁が生まれ、二〇一九年四月に家族とともに東京から移住した。

SMO南小国の取り組みは、実に多角的。現在は、地域商社(物産館・ふるさと納税)、観光振興(南小国町観光協会、ツアーリズム)、情

報発信(観光、商品、人の情報発信)、未来づくり(コワーキングスペース運営、起業・新規事業創出)の四事業部が柱になる。

「SMO南小国の役割は、地域の内外をつなぐハブ機能。移住や起業を含めた『人的な資本』、企業との連携なども含めた『物的な資本』、そして金融資本、これらをいかに最大化していくかがわれわれのミッションです。民間ベースの視点なら、行政の立場ではリスクを取りづらい課題にもチャレンジしやすいですし、縦割りにないがちな役場の動きを面でつないで効率化できるのも強みです」

例えば、周辺自治体のふるさと納税業務に関与するなど、SMO南小国の取り組みは現在、自治体の枠を超えて広がっていると安部浩二氏は話す。

「隣接する小国町や産山村うぶやまの業務も担い、広域エリアの文化・経済圏をシームレスにサポートするプログラムの提供にも努めています。南小国町には、そういう活動が許される度量の広さがありますね」

安部浩二氏とともにその事業を牽引けんいんするのは、未来づくり事業部長の安部千尋氏だ。東京都内の

「福岡県や大分県にも近い南小国町は昔から交通の要所だったため人の行き来があり、外の人を受け入れやすい土壌や文化があったのではないかと思います」と話す SMO 南小国 COO の安部浩二氏。



右／2019年5月に完成したSMO南小国が運営するコワーキングスペース「未来づくり拠点MOG」は、住民によるイベントが開催されるなどチャレンジの場にもなっている。

下／町内外の人々をつなぎ、あらたな未来を生み出すために町を思う仲間たちと話し合いを重ねる、SMO南小国の安部千尋氏。



公務員や地域振興の仕事を経て、当時、南小国町が開催していた移住関連のイベントに参加した際、南小国町役場の行動力とスピード感に惹かれ、移住を決めたという。「南小国町では、誰かが町をよくしてくれるのではなく、守りた

いものがあるから自分が動くという当事者意識を強く感じます。そのような中で私が担うのは、町の方々がより活躍できる環境をつくること。起業支援や新規事業立ち上げに関するご相談に対応する一方、この町で起業したい人や若い世代を呼び寄せる仕組みを構築し、その双方をつな



ぎながら相乗効果が生まれることを目指しています」

「事業者は人手不足なのに対し、住民は仕事がないと訴える矛盾が生じた現状をふまえ、千尋氏が今、力を注ぐのは人材環流事業だ。

「この状況は、主産業の観光業や農業を含めた町産業において、繁忙期と閑散期の人手の需要が異なることが影響しているのかもしれない。構造的な課題ですが、仕組みで改善できることも。例えば、弊社で取り入れた限定正社員制度は、パートタイムの勤務でも正社員の待遇を受けられ、責任を持った仕事ができます。小さなお子さんがいる社員も含めて働きや



「挑戦することに前向きな方々が、南小国町には多い。足りないものがあれば外の人とも手をつなぎ、柔軟な意識もあるのが魅力的」だと、安部千尋氏は語る。

すいという声が上がっており、この学びを事業として展開できればと思っています」

挑戦という点においては、「コロナ禍という逆境もまたチャンスだった」と安部千尋氏は振り返った。青年海外協力隊や留学などを希望しながらも、コロナ禍のため海外への道を閉ざされた若者向けに、南小国町で働きながら過ごす「ワーキングバケーション」を催行。参加した若者からは「今までは海外にばかり目を向けていたが、日本の地域でこんなに可能性にあふれる場所があるなんて知らなかった」という声がかれたという。他にもSMO南小国が進めてい

る取り組みは多岐にわたり、既存概念にとらわれないSMO南小国の発想と町への熱い思いが、住民の間に広がる種火のエネルギータンになっていくことが実感された。

里山の暮らしにふれる インバウンドツアーへの期待

SMO南小国の観光事業部において、インバウンドを担当するのは二〇一八年十月にスウェーデンから移住したワル・マックス氏だ。「移住する前、留学で京都に住んでいた頃から九州が好きでしたし、日本の田舎で暮らしたいという希望はありました。お声掛けがあつて訪れた南小国町では、景色や料理にもまして、優しく情熱的で、生き生きとした人たちに感動しました」

地域とのコミュニケーションを重ねる中、立案したのは地元の人々との交流を重視したインバウンド向けツアー「Satoyama Journey」だ。

「九州に来る海外の方は、既に東京や京都、北海道などの定番観



「参加者にとって人生の次のステップにつながるヒントを与えられるようにと考えてツアーを企画しました」と話すワル・マックス氏。南小国の景色を描いた水彩画からは、町を愛する思いが伝わってくる。



光地を訪問済みで、初めての日本旅行ではない可能性が高い。その分、日本の大ファンで、より深く、文化や暮らしの本質を知りたいはず。そう考え、野菜の収穫や調理して食べる体験によって、農家の人たちと一緒に過ごせるプログラムを企画しました。阿蘇の自然の

魅力に加え、人の温かさも感じられるだろうと」

あいにくと立ち上げ直後にコロナ禍に見舞われたが、マックス氏はコロナ禍収束後の未来に期待をかける。

「環境問題への意識が強い海外とりわけ欧州発の観光客には、サステナビリティを意識したツアーを構築する必要がありますが、ここには里山で培われた素晴らしい暮らしがある。さらには、阿蘇の草原は二酸化炭素の大きな吸収源、と語れるのも強みです」

マックス氏の視点は、地元で働く外国人にも向けられている。

「現在、宿泊業や建築関係の技能実習生などを含め約一〇〇名の外国人がいます。彼らの交流の場をつくりたいと思い、始めたのがinternational（国際的）な持ち寄りランチ会です。internationalという言葉を使ったのは、日本人、つまりは地元の人も関わってほしいという思いがあつてのことでした」

参加者にとって和む機会になっているのはもちろん、それぞれの母国語を紹介するといった住民を巻き込んだイベントが生まれてい



マックス氏が企画した南小国の里山の暮らしにふれられる「Satoyama Journey」の農業体験ツアーは高い評価を得ており、コロナ禍後の展開に期待が寄せられる。

るのが面白い。

マックス氏は広く阿蘇地域の通訳案内士としての肩書も持ち、活動の場は町内にとどまらない。その笑顔と行動力がもたらす輪は、次から次へと広がっている。

新しい挑戦を生み続ける「黒川温泉一旅館」の理念

南小国町の観光の要的存在である黒川温泉でも、あらたな挑戦が重ねられていた。町並みをそろうえ、

温泉内のすべての露天風呂を利用できる「入湯手形」のもてなしを手掛けるなどして、「露天風呂の黒川温泉」として全国に知られるようになったのは一九八〇年代のこと。一九九四年には「黒川温泉一旅館」の理念を掲げたと振り返るのは、黒川温泉観光旅館協同組合代表理事の音成貴道氏だ。

「三〇軒が一つであるという、黒川温泉一旅館のスタンスは今も変わっていません。かつて一丸となつて改革を進めてきたのは、僕たちの親の世代。その後もなぜ継続できるのかとよく聞かれるのですが、親の一生懸命な姿を見えますし、小さなエリアなので仲よくするのは当たり前。自然に引き継がれている感覚です。持ち回り



江戸時代の細川藩直営の宿が礎になったといわれる黒川温泉は現在、夫婦滝へと続く清流である田の原川に沿って旅館が建ち並び、環境保全の取り組みも早くから行われてきた。

黒川温泉観光旅館協同組合代表理事の音成貴道氏（右）と、組合事務局長の北山元氏（左）。組合設立60周年を迎えた2021年、体制強化を図る計画として「2030年ビジョン」を発表した。組合を運営する中心メンバーの中では、50代の音成氏が最年長で、多くを40代が占める。



で行う神社やお寺の掃除やどぶさらいにも、一人も欠けることなく参加します」

環境問題への取り組みも先駆的に発信してきた、黒川温泉の現在の課題は人材の確保。二〇二〇年には、従業員のキャリアアップや次世代リーダー育成を目的とする「黒川塾」が立ち上げられた。

「約六七〇人が黒川温泉で働いていますが、旅館は家業としての営みが基本ということもあり、若い世代にとってキャリアの先を見通すのは難しい。黒川塾で学んだことは他での経験にも生かせますし、

2012年には放置竹林の間伐、再生活動として、竹ひごでつくる灯籠の明かりが温泉街を彩る「湯あかり」がスタート。冬の風物詩となり誘客につながった。



(写真提供：黒川温泉観光旅館協同組合)

キャリアを重ねてから黒川に戻って来る流れも見据えています」

二〇二二年二月には、雇用に関する専用ウェブサイトをスタート。組合事務局長の北山元氏^{はじめ}が、その意義について話してくれた。

「各旅館の特徴や雇用条件といった基本情報はもちろん、それぞれの宿のビジョンや求める人材、そこで築けるキャリアも、ここでは語られています。たとえば、ある宿の取り組みが農業や食に特化していれば、農学部が食に興味を持つかもしれません。ご自身のスキルを生かすという視点で、働く場を選んでいただきたいと思っています」

あか牛の「つぐも」事業（「継ぐ」と「牛（モー）」を意味する造語）もまた、あらたな一歩だ。南小国町

をはじめ阿蘇一帯の草原で放牧されているあか牛は、これまでも黒川温泉でも提供されてきた。しかし、地元ではあか牛を牛肉用に育てたり、食肉処理したりということができず、いったん地域外に出されるため、地産地消が完結できていなかったと北山氏は語る。

「顔が見える農家が育てた肉を黒川で召し上がっていただき、地域の経済に還元、循環させる。あか牛を召し上がった方々からいただく対価の一部を、あか



上／草原で放牧されて育つあか牛の肉は脂肪分が少なく、赤身肉そのものの旨味が堪能できる。下／他の地域の方が活性化に携わり、その活動に応じて各種サービスが利用できる「第二村民構想」は2017年に誕生し、今なお黒川温泉を支える力になっている。（写真提供：黒川温泉観光旅館協同組合）

牛の購入やPR活動などに活用する。阿蘇の草原を守り、そこで育つあか牛の堆肥を活用すれば、昔からある循環型農業を受け継ぐことにもなります」

南小国町一帯は福岡県まで続く筑後川の流域であり、この地での影響が中下流域に住む人々や遠く海にまで至るがゆえ、自然を守る重い責任が自分たちにはあると北山氏は言う。

「観光での体験は、阿蘇の景観の維持管理につながる。あか牛もその流れの一つで、味わうことで環境を守る当事者になる。将来的には、より多くの方にそういう意識を持っていただきたいですね」



熊本県平成の名水百選にも選ばれた「立岩水源」は、県内外から多くの人々が湧き水くみに訪れる。



名水に恵まれた南小国町にはそば処が多く、専門店が並ぶ「そば街道」は観光客にも人気が高い。



山の資源を未来へと継ぐための理念あるブランドづくり

ブランド杉「小国杉」を受け継ぐ林業では、家具のデザインから製作、建築まで幅広く手掛ける株式会社Foreque代表取締役の穴井俊輔氏の活動が国内外から注目されている。穴井氏は長く海外を旅した後の一〇年前、家業であり現在も父親が営む製材業を



「コロナ禍の影響で、自分が何年先にもきちんと向き合えるものしか買わなくなったという声を、最近周囲で聞くようになりました」と話す、Foreque代表取締役の穴井俊輔氏。ふるさと納税を利用した、Forequeの家具購入も増えているそうだ。

継ぐために南小国町に戻ってきた。そして、全盛期には約四〇社あった製材所が四社になっていた状況に危機感を抱き、活性化を図る目的で二〇一六年に同社を立ち上げた。

「僕が思ったのは、南小国の風景や暮らし、小国杉の歴史といった目には見えない心の資本をどうやって積み上げていくかがこれからの課題ではないかということでした。より広く捉えるなら、一〇〇年にわたり受け継がれてきた阿蘇の草原とそこでの営みから小国の杉が生まれてきたという、背景への共感や感動を伝えなければモノは売れない時代になっているのではないかと」

そんな思いを込め、二〇一七年

エッセンシャルオイルやポプリ、アート、小国杉を使った椅子やテーブルなどが並ぶ、Foreque内はショールーム兼ショップになっている。小国杉は油の含有率が高く、使い込むうちに艶が出るという。



に立ち上げたプロジェクト「FILL」のコンセプトは「満ちあふれた人生」。小国杉を使った家具が世界的なブランドの広告にも採用されるなど徐々に成果が実り始めたのは、デザイン性だけではなく理念が高く評価されたことだ。「根本にあるのは、この里山の景色を守ること。五〇年後、一〇〇年後のために山々をどう維持管理



していくのか。理想的な山づくりの一步がFILLです」
さまざまな経験を経て、家業でもある製材所を守ることも、大事なことだと気づかされたそうだ。
「製材所がなければ、たとえ目の前に山があっても、地元にいる自分たちだけでは何もできない。山や製材所といった伝統や文化を次世代へつなげていくことが、僕の使命だと思っています」

穴井氏が子どもたちに未来を託す場として、中学生向けのファブラボがあり、そこではまず、中学生自身がパソコンでプログラミングすることから作業が始まる。そのプログラミングデータをレーザーカッターに入力すると、カッ

中学生のためのファブラボ施設、エッセンシャルオイルをつくる工房もあるForequeは牧歌的な景色の中に。



ターが木材を自動で切断する。その後、自分でその木材を組み立て、仕上げ加工までを行う。デジタルとアナログの融合が特徴的だが、作業そのものよりも穴井氏が大切にするのはストーリーだ。

「林業は植林してからお金になるまで約八〇年かかりますから、自分たちの曾祖父や祖父が植えた木を次の時代のニーズに合わせて加工することに価値があると伝えていきたい。木を介した子どもたちの育成。つまり木育が、山を育てるのではないのでしょうか」

人材確保が課題だった製材所にも、新しい風が入り込んでいる。県外からの就職希望の問い合わせは増え、二〇二二年四月には二人の新卒生が仲間入りする。また、二〇二二年末には桜並木が見渡せる敷地内にカフェが完成とか。人のやさしい流れが生まれることだろう。

子どもたちの心に刻まれる町の未来を考える体験

あちらこちらで多くの人々の挑戦が花開く状況をふまえ、町長の高橋氏はこう語る。

「町の規模が小さいからこそ、顔が見える関係性の中でできることがある。課題が多いからこそ、課題先進地になり得る。多角的な視点で物事を見ることにより、マイナスをプラスに考えられるのではないのでしょうか」

Forequeの近く、竹の熊天満宮境内の「竹の熊の大ケヤキ」は樹齢一〇〇〇年以上。西日本では最大のケヤキ。穴井氏にとっては、幼頃の遊び場だった。



大小の石が人為的に置かれ、古代の祈りの場だったともいわれる「神戸石の丘」。



職場体験プログラム「まちインターン」は、町内の中学2年生を対象に行われる。(写真提供：南小国町教育委員会)

現在、生活・経済圏や、観光圏を共有する隣接の小国町、産山村さらには広く阿蘇郡市の市町村とも連携が進められる一方、地元の子どもたちには地域を思う体験の場が設けられている。その一つが、中学生の「まちインターン事業」だ。「単に仕事を手伝うのではなく、もう一歩踏み込んで職場の課題解決のために自分は何ができるのかを考えてもらいます。町長秘書のインターン生もいて、最近も観光誘客のための動画内容について、一緒に知恵を出し合いました」

子どもたちが町の未来を考え、アイデアを発表する「南小国町小中学生プレゼンテーション大会」もまた、地域を思う彼らの意識を育むことだろう。

「現在、南小国町の子どもたち

が地元で学べるのは中学校までですが、経験を積めるなら外に出ることはマイナスではないはず。故郷が楽しそう、面白そうだから将来は戻ってみようという流れが醸成できると期待しています」

一見、先駆的にも思える南小国町の動向について話を伺ううちに気づかされたのは、昔ながらの人のつながりや温もりが礎としてあること。里山同様に小さなコミュニティで当たり前のようを守られてきた絆がこの先も、さらなる挑戦を生むのではないだろうか。



中心地から少し離れば、山々と草原が連なる美しい景色が望める。神戸石の丘からの眺めの先にあるのは、釈迦が横たわった姿に似ていることから涅槃像と呼ばれる阿蘇五岳。